

第28回企画展

多賀城市埋蔵文化財調査センター開設30周年記念

# 多賀国府

古代の多賀城から中世の府中へ

2017 10/1 SUN 日

▶ 12/17 SUN 日

於ニ多賀國府一。郡郷庄園所務吏。

條々被レ仰ニ含地頭等一。就レ中不レ可

下費ニ國郡一煩中土民上之由。御旨及ニ

再三一。加之被レ置一紙張文於府廳

云々。其状御云。以ニ庄号之威勢一。

不レ可レ押ニ不當之道理一。於ニ國中吏

者。任ニ秀衡泰衡之先例一。可レ致ニ

其沙汰一者。

多賀城市埋蔵文化財調査センター展示室



開館時間 9:00 ~ 16:30

休館日 月曜日（祝日の場合は翌日）

〒 985-0873 宮城県多賀城市中央2丁目27-1

☎ 022-368-0134

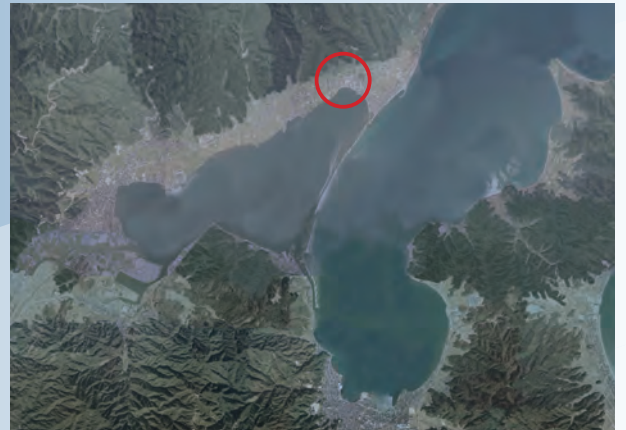
主催：多賀城市 多賀城市教育委員会

後援：  河北新報社  仙台放送局

# 律令体制の衰退と地方政治の変質

10世紀になると、古代的な律令体制が衰退し、中央はもとより地方の政治も大きく変化していきました。考古学的にも、10世紀後半以降の国府の遺構は明確でなく、古代的な政庁を中心とした官衙も、立地や規模、建物の構造など大きく異なるものに変化していったと考えられます。古代から中世にかけて、変貌する国府の姿はとらえ難く、その実像は、考古学、文献史学、歴史地理学など今後の研究に俟つところが大きいのが現状です。

## 丹後国



丹後半島の基部、宮津湾に面した狭い谷間に国府が存在したと考えられています。室町時代に雪舟が描いた「天橋立図」には、山間に寺院や町並みなど府中の様子が描かれ、「成相寺参詣曼陀羅」には府中の賑わいととも、市場が描かれています。  
(京都府宮津市)

## 長門国



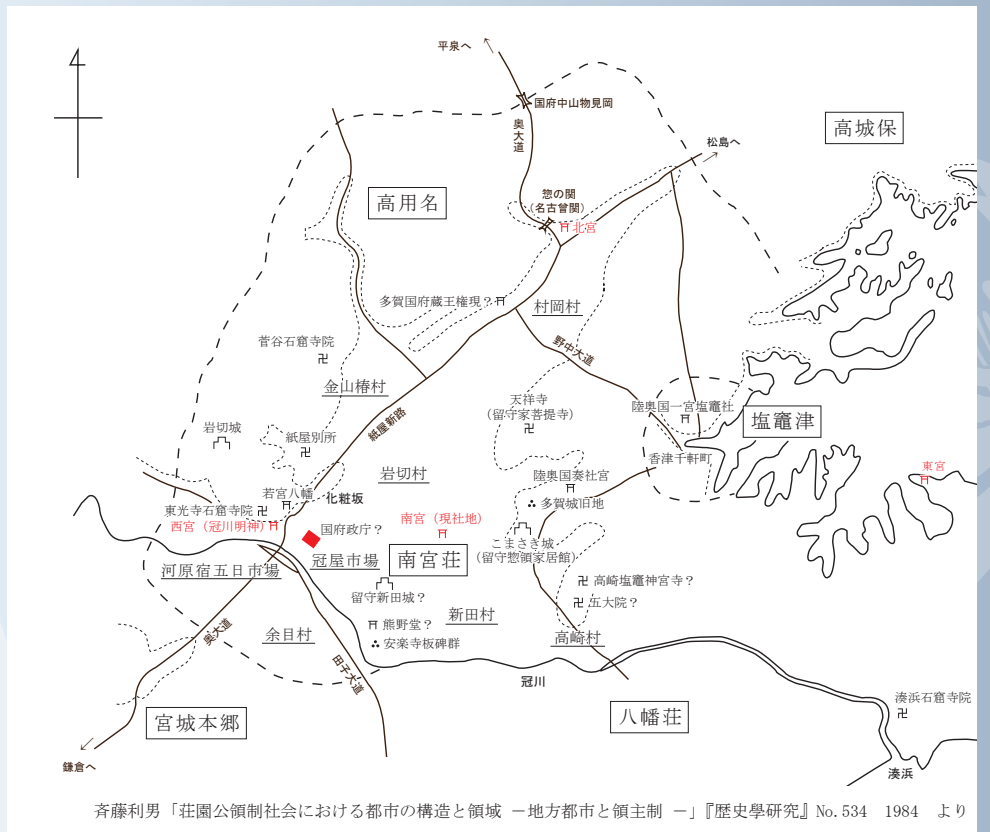
赤間関の北東に位置する下関市長府に国府が存在したと考えられています。南北朝期の景観を伝える「忌宮神社境内絵図」の分析や地形、地名の検討を通して、神社周辺に国庁、守護館、道路などの国府の様子が復元されています。  
(山口県下関市)

## 遠江国



遠州灘から約5km内陸の磐田市街地に国府が存在したと考えられています。その北西部の見附には大規模な中世墓群が形成されており、在庁官人の墓域と推定されています。  
(静岡県磐田市)





斉藤利男「荘園公領制社会における都市の構造と領域 -地方都市と領主制-」『歴史学研究』No. 534 1984 より

### 多賀国府の研究

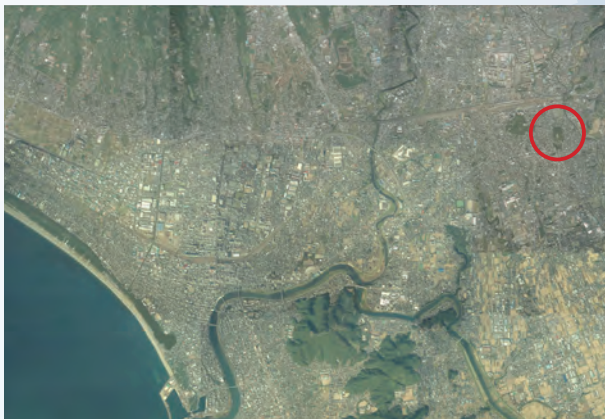
1984年、斉藤利男氏は、地方都市の実態解明のため、陸奥国多賀国府の分析を行いました。官衙・居館を中心に、大路によって結ばれる宿・市・津を含んだ広い都市領域から成り立ち、都市的なまち並みと農村の入り混じった世界が「中世都市多賀国府」の景観だとの見解を示しました。

### 常陸国



霞ヶ浦の北西、石岡市街地の西寄りに、平安時代後期から鎌倉時代にかけて位置を北側に移動しながら国府中枢部が存在したと考えられています。在庁官人の所領の分析、関連施設の位置など、文献史学の立場から研究が進められています。(茨城県石岡市)

### 伊豆国



あぶつに いざよいにつき  
阿仏尼の「十六夜日記」には「いつのこふといふ所にとどまる……みしまの明神へまいる」との記載があり、伊豆国府は三嶋大社周辺にあったようです。「吾妻鏡」には、一の谷戦いで捕らわれた平重衡が鎌倉へ送られた時、源頼朝はこの地で面会したと記されています。(静岡県三島市)

# 前九年・後三年合戦と東北

平安時代末期、陸奥国では安倍氏が奥六郡を、出羽国では清原氏が仙北三郡を支配し、その勢力は国司を凌ぐほどにまで拡大しました。安倍氏・清原氏は各所に柵を構えて拠点とする一方、柵内には寝殿造りの系譜を引く主殿を設け、在地領主として軍事のみならず文化的にも成長していきました。朝廷はその勢力を抑えるため、源頼義・義家父子を派遣した結果、前九年合戦・後三年合戦と呼ばれる戦いがおこります。

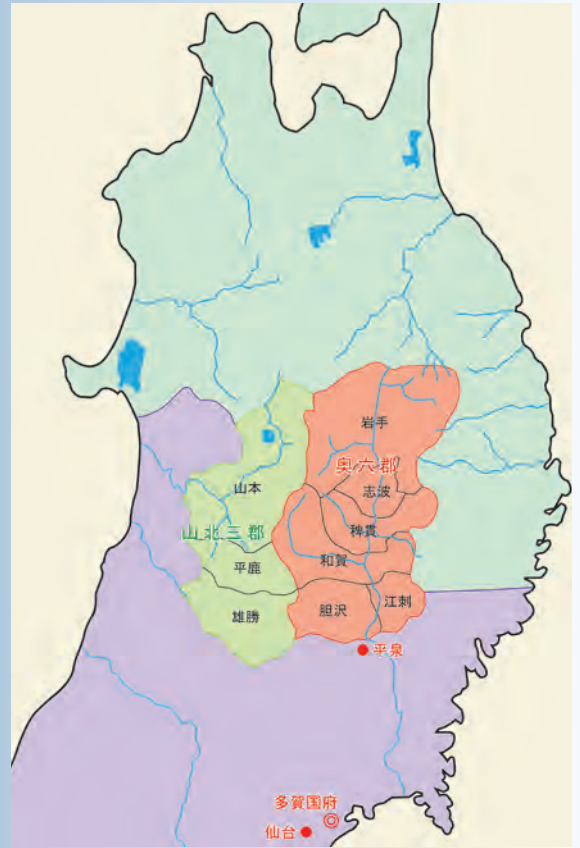
## 安倍氏と清原氏

安倍氏は、都から下向した鎮守府の官人を祖とし、「安大夫」と名乗りました。一方清原氏の出自は不明ですが、前九年合戦後に鎮守府将軍に任じられ、名実ともに北東北一の支配者になると「御館」と称するようになりました。



陸奥守源頼義に馬を献上する安倍頼時 (前九年合戦絵巻)

東京国立博物館蔵 Image:TNM Image Archives



奥六郡と仙北三郡

## 安倍氏・清原氏の柵と主殿

安倍氏の鳥海柵は自然の沢とともに大規模な堀で郭を形成し、清原氏の柵と見られる大鳥井山遺跡は二重の堀と土塁及び柵列を巡らした軍事拠点でした。しかし、その内部に設けられた主殿は、古代官衙の系譜を引く四面庇付建物でした。



大鳥井山遺跡 (横手市) 左:堀と土塁 右:四面庇付建物

写真提供:横手市教育委員会



鳥海柵跡 (金ヶ崎町) 上:遺跡全景 写真提供:金ヶ崎町教育委員会 下:四面庇付建物



清原氏の伏兵に攻撃を仕掛ける源義家 (後三年合戦絵詞)

東京国立博物館蔵 Image:TNM Image Archives

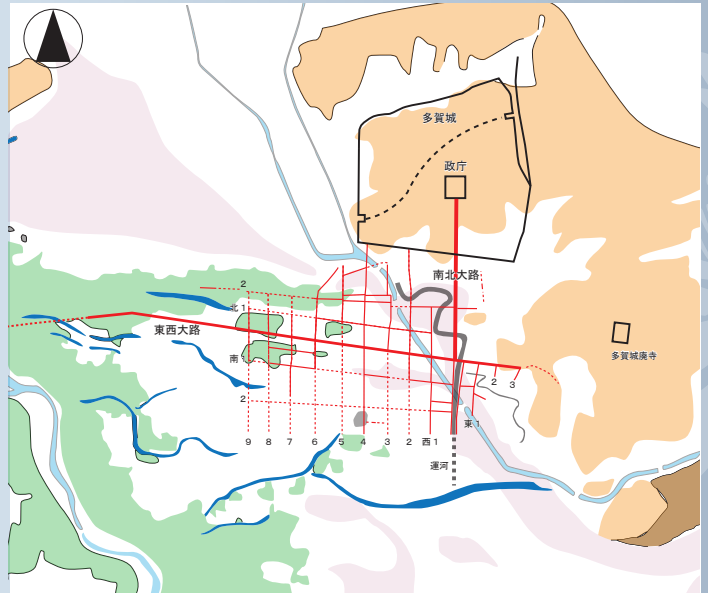


# 多賀城から多賀国府へ

史料上、「多賀城」の名は承和6年(839年)の記事を最後に消え、発掘調査においても、10世紀後半以降の国府の状況は明らかではありません。しかし、城内からは古代末期の灰釉陶器や貿易陶磁が発見され、国の中心としての国府の存在は伺うことができます。史料上では、12世紀に、中世の陸奥国府である「多賀国府」の名が現れますが、古代の陸奥国府からどのように続いていくのかは、未だ解決されない大きな問題となっています。

## 多賀城の衰退

延喜15年(915)、噴火した十和田の火山灰が降下した頃、多賀城では豪壮な官衙域が衰退に向かい、国府機能の一部は城外の国守館に移っていたと考えられます。全国的に国司館の役割が増大する中で多賀城は衰退し、多賀国府へと変貌を遂げます。



平安時代の多賀城城外のまち並み

整然と区画されたまち並みは、中世には受け継がれず廃絶しました。



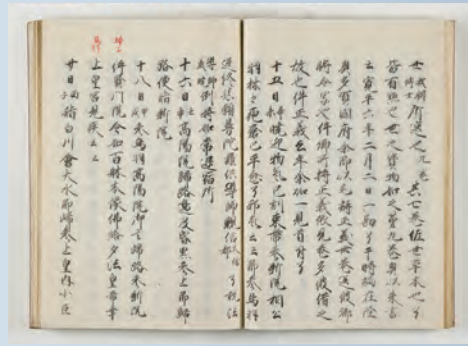
915年に降下した灰白色火山灰(市川橋遺跡)



国守館(山王遺跡千刈田地区)



多賀城政庁正殿周辺の瓦の堆積  
写真提供：宮城県多賀城跡調査研究所



## 台記

「台記」は悪左府と<sup>ふじわらのよりなが</sup>呼ばれた藤原頼長の日記です。康治2年(1143)5月14日条に見える「陸奥多賀国府」の記載が、多賀国府の史料上の初見となっています。

東京大学史料編纂所蔵



描かれた多賀国府(後三年合戦絵詞)

東京国立博物館蔵 Image:TNM Image Archives

命に背き、<sup>かねざわのさく</sup>金沢柵に立って籠もった<sup>きよはらのいさむら</sup>清原家衡・<sup>たけひら</sup>武衡の連合軍を討つため、国府の<sup>たち</sup>館を出立する源義家が描かれています。縁でつながれた複数の建物、館を囲む築地塀など、現地から離れた都の絵師の作とはいえ、多賀国府の館を描いた貴重な場面です。



# 平泉と多賀国府

12世紀はじめから四代にわたって東北地方を実質的に支配した奥州藤原氏は、莫大な財力を背景に邸宅や寺院を相次いで建立し、国府を凌ぐほどの繁栄を見せるようになります。平安時代後期になると、国司は任国に赴任せず目代を派遣する風潮が強くなり、多賀国府は、留守職を中心とする在庁官人が国政を担っていました。主に内政面を司る多賀国府に対し、奥州藤原氏は軍事や北方世界との窓口として国政を支えました。

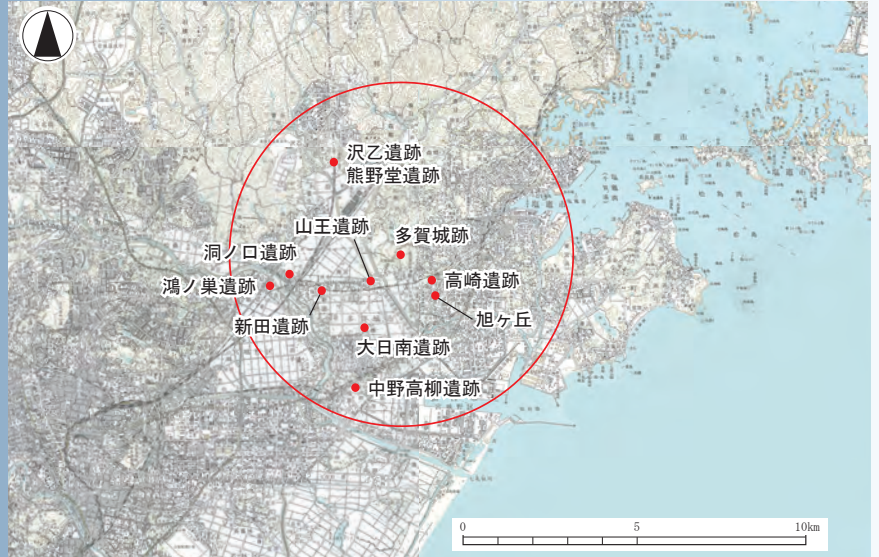
## 12世紀の多賀城

発掘調査の結果、古代多賀城の終末は11世紀前半とされています。しかし、12世紀後半頃、政庁前の道路を掘削して居住空間が造成され、官衙城だった作貫・大畑・五万崎地区も中世に利用されるなど、多賀城は、12世紀段階において宮城郡東部の中核的な遺跡でした。



政庁前の道路を壊して造成された平場

写真提供：多賀城跡調査研究所

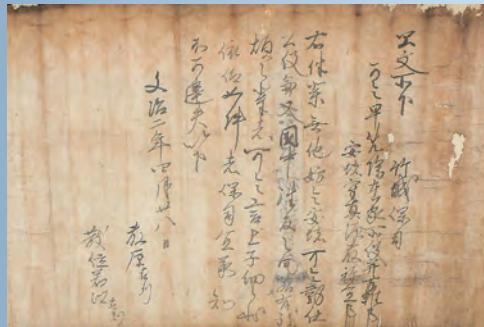


12世紀の遺物分布図



大畑地区の四面庇付建物

写真提供：多賀城跡調査研究所



陸奥国衙公文所下文寫  
(鹽竈神社文書)

文治2年(1186)、多賀国府の公文所が、竹(高)城保司に対し、年貢や雑役を免除して神社の禰宜を安堵させるよう命じた文書です。東北地方最古の中世文書であり、鎌倉時代初期における多賀国府の活動を示す貴重な資料です。

## 中心施設の変化

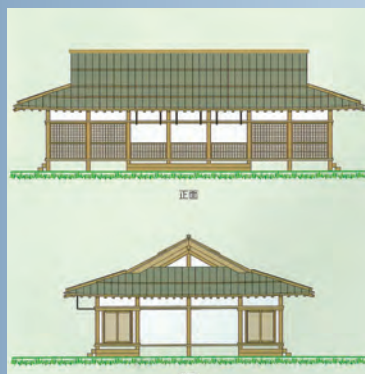
古代の政庁は、瓦葺の大型建物で構成された定型的な施設でしたが、安倍氏・清原氏・奥州藤原氏の時代になると、和風の四面庇付建物を主殿とした施設が地域支配の中心となりました。建物配置の画一性は失われ、ほかの施設との際立った差は薄れていったようです。



多賀城政庁(8世紀中頃) 写真提供：東北歴史博物館



山王遺跡 国守館主殿(10世紀前葉) 原画：早川和子



左：大鳥井山遺跡主殿  
(11世紀)

写真提供：横手市教育委員会

右：平泉館(12世紀)

写真提供：岩手県教育委員会









# 国府の広がり と 周辺の世界

多賀国府の範囲は、古代陸奥国府を中心とした関連遺跡群の広がりを踏襲するもので、その範囲は、留守所るすどころ長官である留守氏が国府運営のため領有していた「高用名」とおおよそ一致します。府中には留守氏の館をはじめ地頭の屋敷、集落があり、河原には市、西端の丘陵部には寺院や墓所がありました。奥大道おくだいどうが黒川郡に抜ける板谷通入口いたやどおりに北宮、塩竈津入口に東宮、多賀城の南西付近に南宮、奥大道の渡河点岩切に西宮が祀られました。



北宮神社



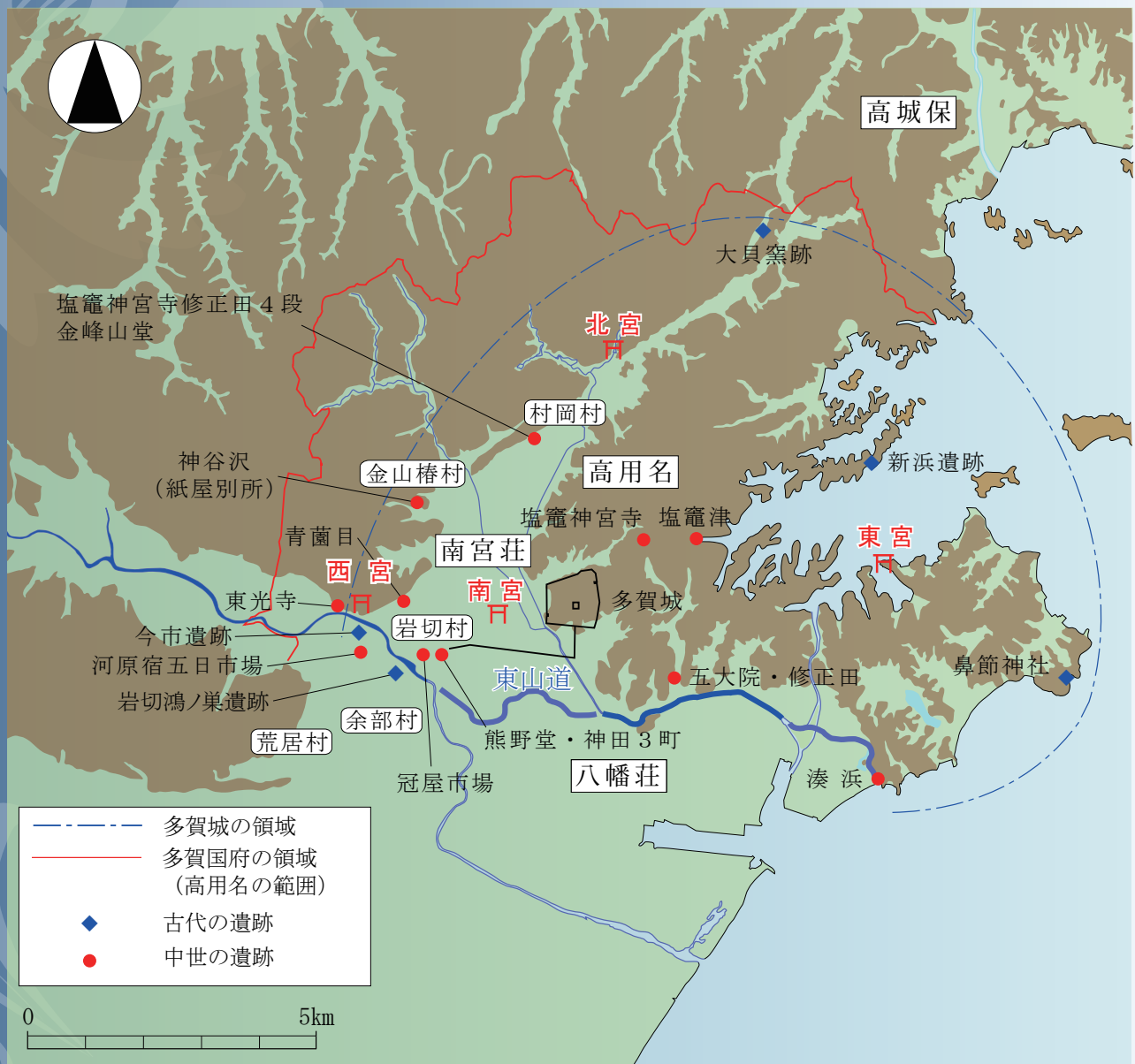
南宮神社



冠川神社 (西宮)



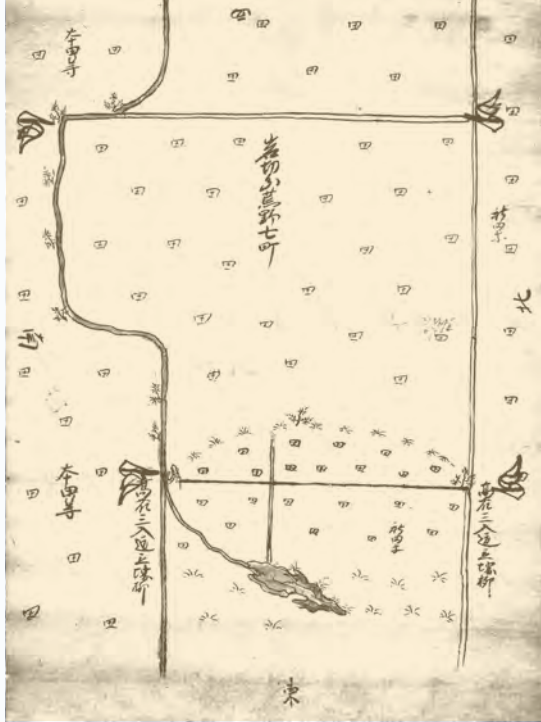
東宮神社





## 高用名

文書には仮名で「かうゆうみやう」、「たかもちの名」と表記されますが、本来は「国府（こう）用名」から転じた名称と考えられます。南宮荘、岩切村、餘部村、村岡村、金山椿村、高崎村、新田村を含む広大な名（みょう）でした。



「岩切分荒野七町」絵図（留守家文書）

建治元年（1275）に作成されたもので、南側から北側に向けて開発された様子が伺えます。四隅に据えられた花押は留守家二代の家広のもので、土地の譲渡に際して作成されたと考えられます。

写真提供：奥州市立水沢図書館

## 山王遺跡

南宮荘の一部と見られる八幡地区では、周囲に溝を巡らした方形の屋敷が、12世紀から13世紀にかけて隣接して存在したことが確認できます。12世紀段階の屋敷は、一辺約50メートルで、荘官などの屋敷と考えられます。



## やはぎがたて 矢作ヶ館跡

標高約26メートルの小丘陵上に立地する館跡で、頂部の平場を取り巻くように1条の空堀を巡らした簡単な構造です。年代は13世紀にさかのぼる可能性があり、この時期の遺跡の広がり、周辺の丘陵部でも確認できるようになります。



## 化粧坂

西宮の北側に地名が残っています。「留守家旧記」には、岩切城の戦いで敗れた留守家助の子家高が、南部氏に匿われ、3年後その軍勢とともにこの坂まで押し上ったと記されています。



## 湊 浜

旧七北田川（冠川）の河口で、ここから市場までひらた繫が往来したと考えられます。北西約5キロメートルの位置に国津である塩竈津がありますが、両者の関係は明らかではありません。近くに湊浜穴薬師と呼ばれる中世の石窟仏があります。



## 大日南遺跡

やわたのしよう八幡荘は、寛喜2年（1230）のたいらのかけざね平景實讓状に南は海、北は中野までと四至が記されています。七北田川の旧河道に面したこの遺跡は八幡荘の一部と考えられ、中世になって開発が進められた様子が伺われます。溝で区画された屋敷が6区画発見されており、荘官などの屋敷と考えられます。



# 市と墓の風景

多賀国府の西を限る冠川（現在の七北田川）  
 周辺は、市が立ち、寺や墓がつくられた供養の  
 場でした。冠川は、耕地を潤し、物資輸送の  
 船が航行する府中の大動脈であり、その河原  
 では二か所で定期市が開かれ、経済活動の拠  
 点となりました。また、この河原は彼岸念仏  
 に代表される逆修供養の場でもありました。  
 一方、西の山際には東光寺が建立され、墓地  
 が形成されて、その一帯は在庁官人の追善供  
 養の場となっていました。

## 二つの市場

「留守家文書」には二つの市場が登場します。二つの定  
 期市が交互に開催されたこれらの市場は、奥大道の渡河点  
 付近に河原宿五日市場、彼岸供養など行っていた新田の安  
 楽寺付近に冠屋市場が設けられたとする考えがあります。



市場が開かれた冠川の河原



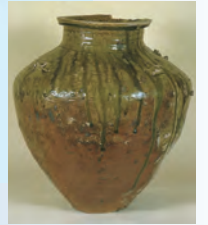
多賀城市新田南安楽寺上空から見た冠川（右上上方は岩切城）

## 運び込まれた焼き物

一大消費地であった多賀国府には、国内の伊豆沼・白石窯製品  
 とともに、東海地方の常滑・渥美窯産の壺・甕・播鉢が多量に持  
 ち込まれました。国内で唯一施釉陶器を生産した瀬戸の製品も多  
 く、東日本では流通量が少ない備前の播鉢や、南伊勢の土鍋、長崎・  
 山口の石鍋も見つかっています。



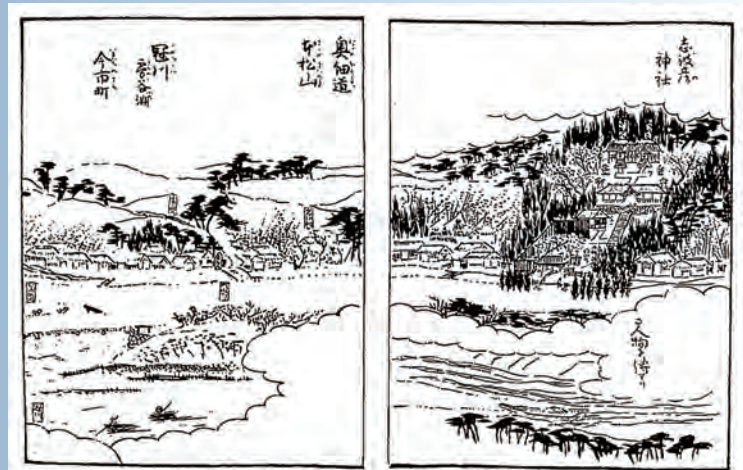
備前



常滑



石鍋



奥州名所図絵



備前国福岡の市の様子（一遍上人絵伝）

清浄光寺（遊行寺）蔵



## 追善と逆修

中世には板碑（石塔婆）を建立して仏事を行う風習がありました。多賀国府では、東光寺周辺が死者を弔う追善供養の場であるのに対し、冠川の河原は、死後の冥福を祈るため、彼岸の日などに生前あらかじめ行う仏事＝逆修供養の場でした。



東光寺

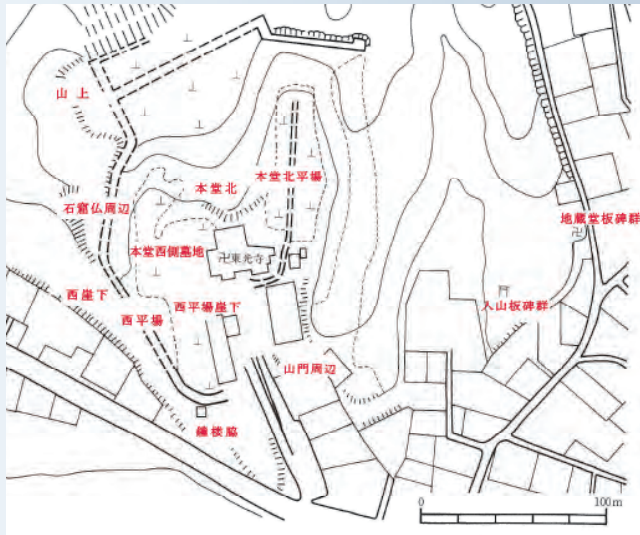


東光寺西平場の板碑

写真提供：仙台市教育委員会

## 供養の場

東光寺周辺では、建治4年（1278）を最古とする167基の板碑が確認されています。これらの板碑の造立者は多賀国府の在庁官人と考えられており、その中には「賀世（加瀬）住人」や「笠上（笠神）入道」など本貫地を示す供養塔もあります。



東光寺板碑分布



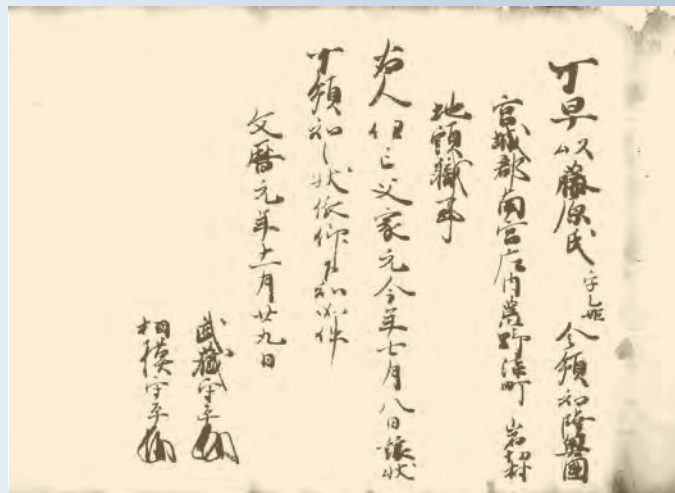
（安） 永仁元年十二月十二日  
賀世住人  
尼念性房  
白 敬

賀世の住人尼念性房の追善供養の板碑

賀世は宮城郡利府町の加瀬

## 文書に見る多賀国府の姿

多賀国府の研究上極めて重要な「留守家文書」には、留守氏一族（あまるめ）余目氏に伝わる代々の所領譲状が多数含まれています。留守氏の所領は「高用名」という国府運営のための特別行政区で、その中には、「南宮庄」や「新田村」「高崎」「岩切村」「余部村」のような荘園や村の名、「河原宿五日市場」「冠屋市場」という二つの市場の名が見出されます。高用名の範囲は多賀国府の領域とおおよそ一致すると考えられ、「留守家文書」からは、留守氏一族が代々受け継いだ様子が伺われます。

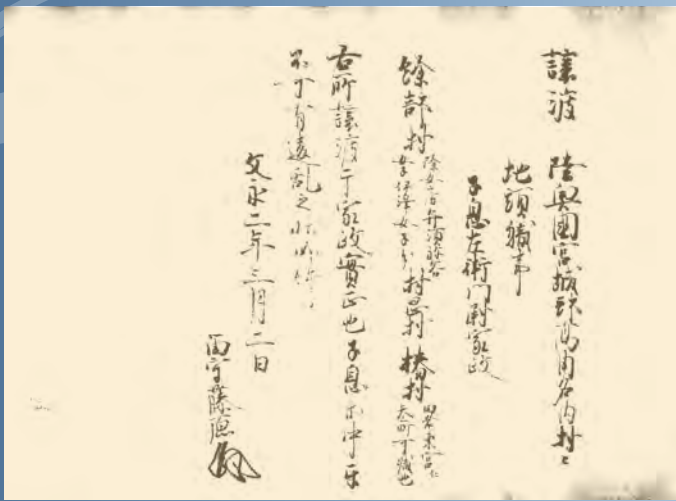


関東下知状（留守家文書）

文暦元年（1234）、留守家元（家景の子）の生前の譲状に基づき、その遺領の一部を娘の乙姫が相続することを認めた鎌倉幕府の文書。

写真提供：奥州市立水沢図書館

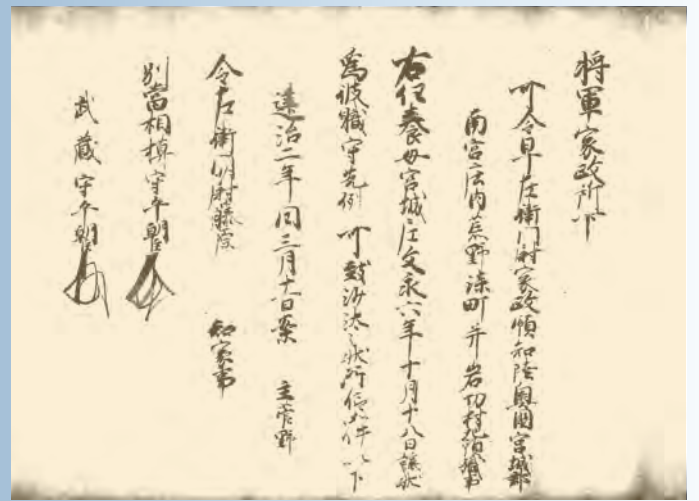




留守家廣讓状（留守家文書）

文永2年（1265）、留守家広（家元の子）が、その子家政に高用名の中の餘部村、村岡村の地頭職を与えた際の讓状。

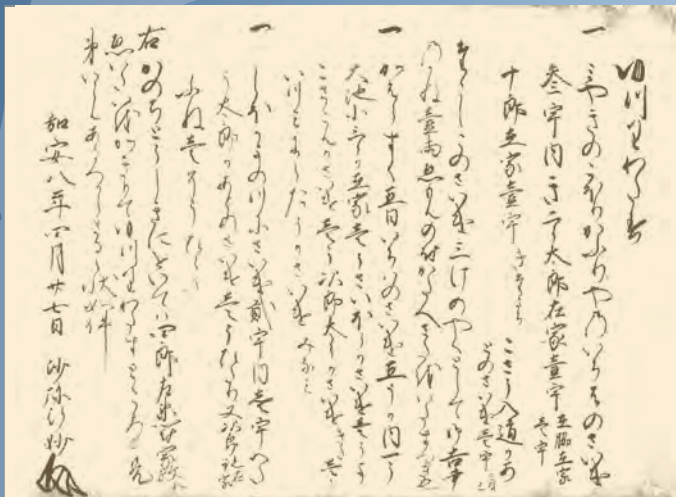
写真提供：奥州市立水沢図書館



將軍家政所下文（留守家文書）

建治二年（1276）、留守家政に対し、養母宮城尼の遺領相続を認めた鎌倉幕府の政所の文書。相続したのは南宮庄内荒野七町と岩切村の地頭職。

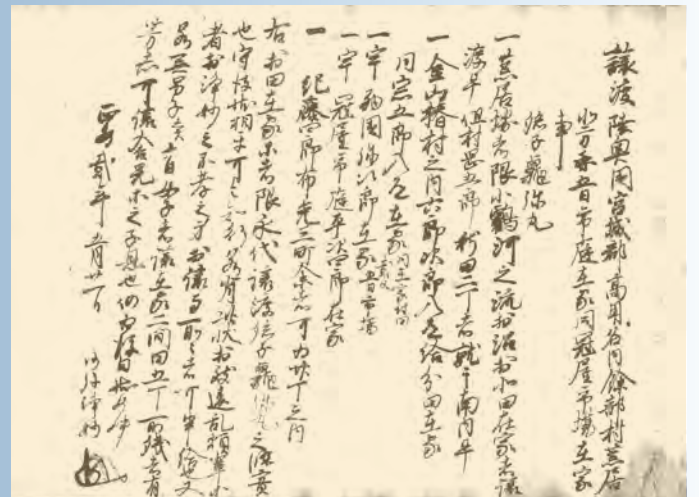
写真提供：奥州市立水沢図書館



留守家廣讓状（留守家文書）

弘安8年（1285）、沙弥妙（留守家広）から家政に讓渡された讓状。市場や塩竈津の在家についての記載。

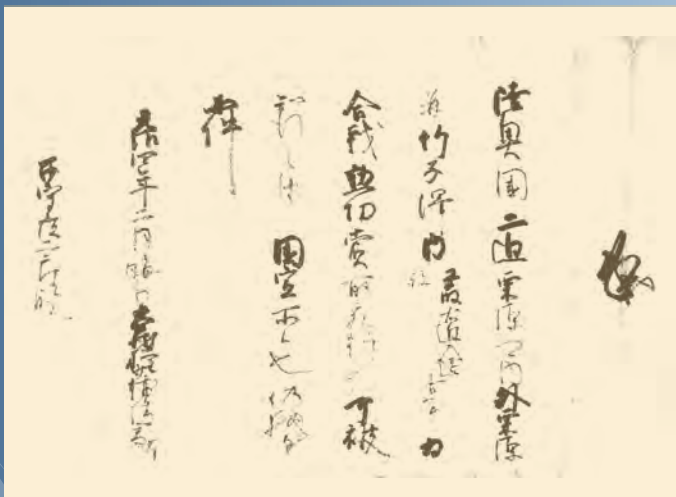
写真提供：奥州市立水沢図書館



留守家政讓状（留守家文書）

正安2年（1300）、沙弥淨妙（留守家政）から孫の龜弥丸に与えられた讓状。譲り渡した市場の在家の中に見られる西国弥次郎は、西国に拠点を持つ商人か。

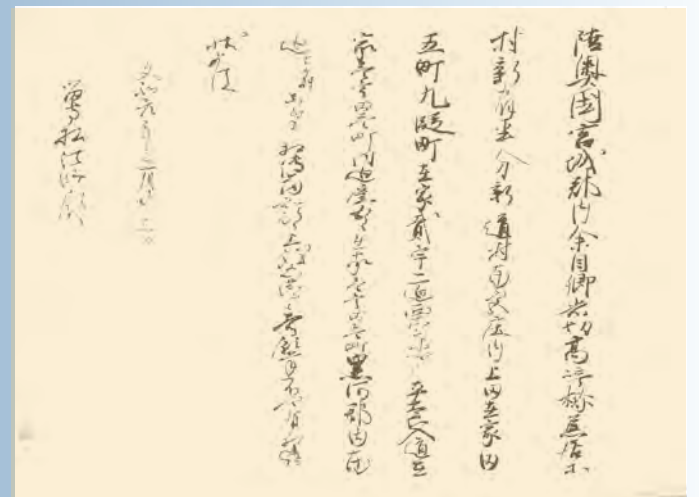
写真提供：奥州市立水沢図書館



陸奥国宣（留守家文書）

元弘4年（1334）、多賀国府が発給した文書。右端には陸奥守である北島頼家の花押が据えられ、戦功を挙げた留守家任に対し、二迫栗原郷を恩賞として与えたもの。

写真提供：奥州市立水沢図書館



足利尊氏御判御教書（留守家文書）

文和元年（1352）、留守松法師に対し、余目郷岩切、高崎、椿などの知行を認めた文書。御教書とは主人の意思を家臣が通達する文書の形式。

写真提供：奥州市立水沢図書館

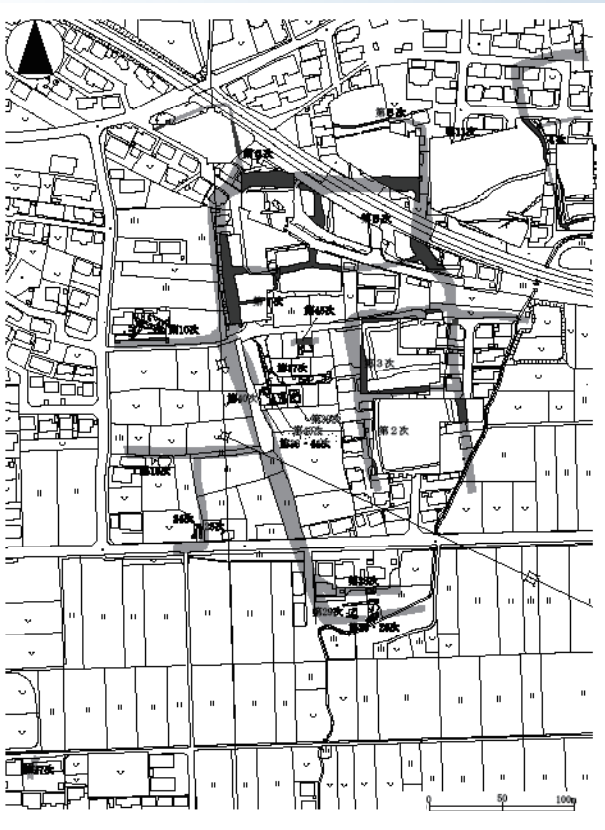


# 留守氏の館

中世の国府では、大規模で朝堂院的<sup>ちやうどういん</sup>な政庁は造営されず、その地域の支配者の屋敷が政庁の役割を担ったようです。多賀国府の場合、留守氏の屋敷が庁<sup>たち</sup>=館として機能したと考えられます。新田遺跡や洞ノ口遺跡(仙台市宮城野区岩切)では、溝で区画された12～14世紀の武士の屋敷が発見され、中国産・国産の陶磁器が多数出土するなど、周辺一帯の拠点施設に相応しいことから、留守氏の館の可能性があると考えられます。

## 武士の屋敷

新田遺跡では、12世紀から16世紀にかけて続いた武士の屋敷を発見しています。いずれも周囲に溝を巡らし、その敷地の中に建物や倉庫、井戸を配置したものです。区画をなす溝はほぼ同位置で改修されています。



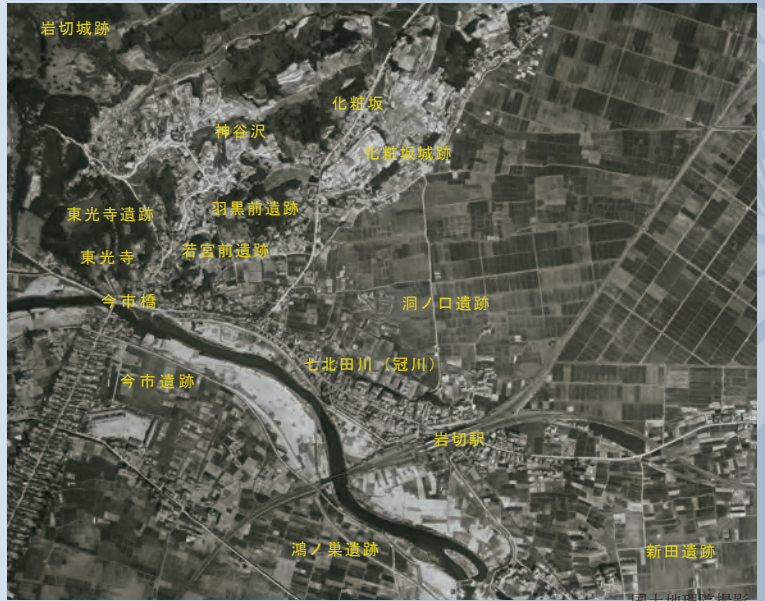
新田遺跡の屋敷跡全体図

## 屋敷で使用された茶の湯の道具

鎌倉時代後期から盛んになった茶の湯は多賀国府でも嗜<sup>たしな</sup>まれていたようで、天目茶碗、茶壺、茶入、茶臼などが各地点から出土しています。



## 多賀国府の広がり



新田・岩切地区航空写真(昭和36年)

地形的にみると、北側は丘陵、西側は七北田川(冠川)、東側は太平洋に面し、南側は水田中に埋没している旧七北田川に面していました。宅地造成や道路整備がまだ進んでいない昭和36年の風景です。

## 火災の痕跡

14世紀前半頃の火災で焼失した建物、被災した<sup>じゅうき</sup>什器を投げ込んだ井戸など確認しています。出土品には中国産の高級な陶磁器や茶臼など高価なものが多いことから、所有者が上級の武士であることを伺わせます。



火災で焼失した14世紀前半の建物跡



焼失した家財道具が投げ込まれた井戸





新田遺跡の屋敷跡（北半部）

洞ノ口遺跡

七北田川の北側に位置する洞ノ口遺跡<sup>どうのくち</sup>では、13世紀から16世紀にかけて続いた武士の屋敷が発見されています。12世紀の陶磁器も出土していることから、その時期の遺構も存在する可能性が高く、出土品の内容は新田遺跡と共通した点が多く認められます。洞ノ口遺跡<sup>にいだ</sup>や新田遺跡のように中世の屋敷が継続して営まれ、良質の陶磁器が多数発見される地域は、その場所が多賀国府の中心に近いことを伺わせます。（仙台市宮城野区岩切）



発掘調査前の様子（昭和62年撮影）



溝で区画された屋敷群の様子



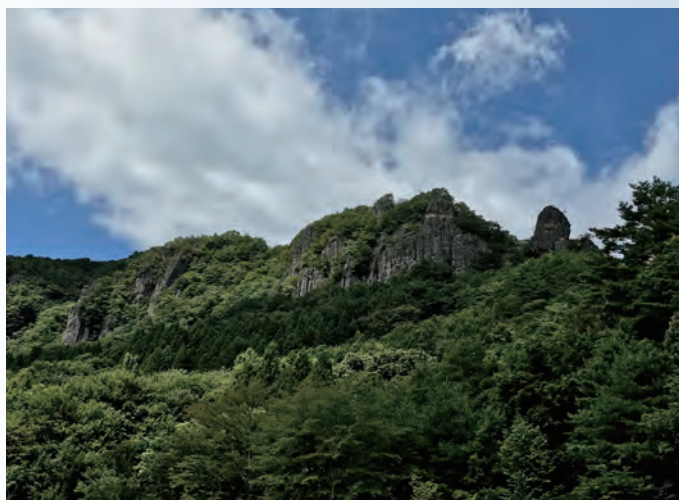
写真提供：仙台市教育委員会



# 府中争奪の争い

後醍醐天皇による建武新政が始まり、北畠顕家は義良親王を奉じて陸奥に下向し、陸奥府中が東国最大の拠点となりました。しかし新政が崩壊し、天皇方と、足利尊氏に従う武家方との戦いが始まると、次第に武家方が優勢となり、天皇方は府中を維持できなくなります。その後、武家方が奥州管領として派遣した吉良氏と畠山氏の主導権争い、後醍醐天皇方の巻き返しなど、戦いは複雑化しますが、常に争奪の舞台となったのは府中でした。

西暦	年号	主なできごと
一三三三	元弘三	鎌倉幕府滅亡。 五月建武の新政開始。北畠顕家が陸奥守に任命される。 一〇月顕家多賀国府へ下向。
一三三五	建武二	八月足利尊氏が後醍醐天皇に反旗。 一二月尊氏上洛。後醍醐天皇京都を脱出。
一三三六	建武三	一月後醍醐天皇比叡山に立て籠もる。 北畠顕家が京都に進撃。尊氏を破る。 二月留守家が足利方につく。 八月足利尊氏が光明天皇擁立。 一二月後醍醐天皇南朝を開く。南北朝時代のはじまり。
一三三七	建武四	一月北畠顕家、府中を出て霊山に籠る。 八月顕家霊山より京都に進撃。
一三三八	暦応一	五月北畠顕家が石津で戦死。北朝方の石塔義房が府中に入る。
一三四二	興国三 康永一	北畠顕信（顕家の弟）が奥方より南下。南奥の結城氏、伊達氏も北上し、府中をうかがう。 石塔義房が三迫に向城を築く。 一〇月三迫合戦。南朝方敗北。結城氏、伊達氏は北朝方につく。
一三四五	貞和一	石塔義房、奥州総大将を解任される。
一三四六	貞和二	吉良貞家、畠山国氏を奥州管領として派遣
一三五〇	観応一	一〇月足利尊氏、直義の二頭政治破綻。
一三五二	観応三	二月足利尊氏、直義を殺害。二頭政治終息。 吉良貞家は府中を奪回。
一三五三	文和二	五月南朝方の拠点宇津峰城落城。北畠顕信、北奥に逃れる。
一三五四	文和三	六月吉良貞家死去。 畠山王石丸、石塔義憲挙兵。吉良満家を襲い、府中を奪う。 七月満家は府中を奪回するが、弱体化。 足利尊氏が斯波家兼を奥州管領に任命。
一三五六	延文一	斯波家兼死去。直持が相続し大崎の地盤を固める。奥州管領の権威が強大化。 吉良治家一族から離反。名取郡から府中に迫る。 足利尊氏が石橋棟義を調整役として派遣。
一三六八	貞治六	畠山国詮（王石丸）、加美郡、黒川郡を給与。斯波詮持と戦いながら南下。 府中の吉良貞経と畠山国詮が合戦。貞経が国詮を破るが、府中を維持できず退去。
一三七三	応安六	この頃まで石橋棟義は府中に残るが、大崎に対抗できず府中を去る。 府中消滅。
一三七四	応安七	
一三八六	至徳三	



霊山

奥州勢を引き連れて足利尊氏を敗走させた北畠顕家でしたが、戦局は不利になり、府中を捨てて、義良親王を伴って伊達郡の霊山に籠ります。霊山は切り立つ岩山からなる天然の要害で、国司館と呼ばれる一角が残されています。



岩切城

足利尊氏と直義による二頭政治は奥州にも波及し、奥州管領畠山国氏と吉良貞家が、それぞれ尊氏党と直義党に分かれて争いました。畠山国氏は近隣屈指の岩切城に籠り戦いましたが、吉良方の攻撃の前に落城し、味方した留守氏も新田城を攻め落とされて壊滅的な打撃を蒙りました。



## 府中の消滅

14世紀中頃、後醍醐天皇方（南朝）と武家方（北朝）の戦い、また武家方の尊氏党と直義党の争いを経て、最終的に陸奥国において実権を握ったのは斯波氏でした。斯波氏が大崎に拠点を移すと、府中は次第に政治・軍事面での優位性を失い、板碑建立が終息して信仰面での求心力も失って、やがて消滅したと考えられます。府中の消滅により、「多賀」の地は、多賀郷として国人領主留守氏の経済基盤を支えていくこととなります。



塔婆としての役割を終えた板碑（新田遺跡）

15世紀以降、板碑を廃棄する例がみられ、この地域における板碑造立の風習に大きな変化があったことをうかがわせます。



岩切城全体図

一の丸や二の丸などの西半部は、山頂の尾根を造成した狭い平場からなり、東半部は山裾に向かって広い平場を造成しています。西半部は防御性が高い「籠る城」に対し、東半部は居住に適した構造になっています。時代とともに、岩切城が生活にも適した構造に変化していく様子が見て取れます。

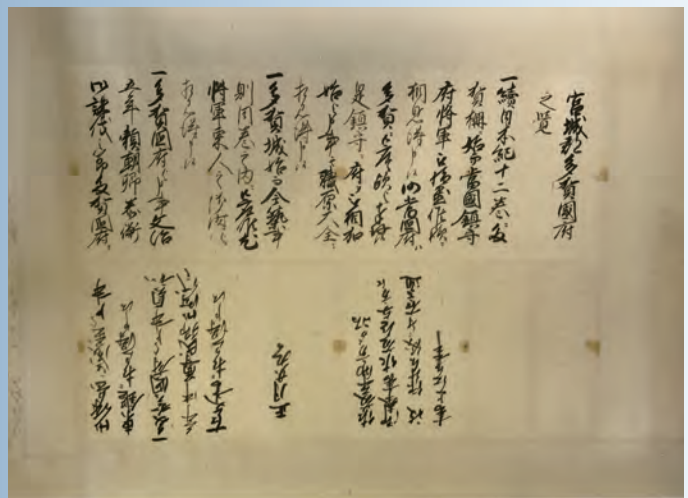


昭和50年以前の岩切城跡（東より）

『目で見える仙台の歴史』より

## 陸奥府中の実像

陸奥府中は、北の黒川郡に続く丘陵と冠川に囲まれた東西約15km、南北約10kmの広がりを持っていました。古代陸奥国府の領域をほぼそのまま継承し、留守職や目代など国政に携わる武士の屋敷が「館」として、古代の政庁に代わる新しい政務の場となりました。府中の西側には川湊に市が立ち、丘陵部には供養の場が設けられるなど、政治的・軍事的・経済的に、そして宗教的にも周辺の集落とは異質な空間と認識された領域、それが府中の実像でした。



宮城郡多賀国府之覚（留守家文書）

江戸時代、仙台藩に提出された多賀国府についての覚書です。古代の多賀城に始まり、源頼朝や足利尊氏との関わりについて記しています。

写真提供：奥州市立水沢図書館